

イラストレーション・ダイアログ
6年間の試み

Illustration Dialogue

Akitaka Ito, Shino Suefusa, Mari Takahashi, Yutaro Ogawa,
Tetsuro Minorikawa, Shohei Senda × Yohei Takahashi

目次

ごあいさつ 「イラストレーション・ダイアログ」展にあたってー表現と言葉の応酬 -----	A19-03
秋山 孝 秋山孝ポスター美術館長・館長、多摩美術大学・教授	
二人展企画「イラストレーション対話展」を振り返る -----	A19-04
高橋 庸平 東京工科大学・助教、多摩美術大学・非常勤講師	
参考資料「庸平君、雄太郎君への秋山孝 10の質問」 -----	A19-08
出品作品	
高橋 庸平 -----	A19-09
伊藤 彰剛 -----	A19-16
末房 志野 -----	A19-18
高橋 真理 -----	A19-20
小川 雄太郎 -----	A19-22
御法川 哲郎 -----	A19-24
千田 昇平 -----	A19-26
イラストレーション対話展 2009-2015 活動記録 -----	A19-28

イラストレーション対話展6 トークショー (2015年5月17日 / PATER'S Shop and Gallery)



ごあいさつ

「イラストレーション・ダイアログ」展にあたってー 表現と言葉の応酬

秋山 孝

秋山孝ポスター美術館長岡・館長
多摩美術大学・教授

秋山孝ポスター美術館長岡 (APM) は、第19回企画展として「イラストレーション・ダイアログ 6年間の試み」展を開催する。展覧会は、もともと東京工科大学助教、多摩美術大学非常勤講師の高橋庸平の企画「イラストレーション対話展」6年間の成果を検証するものである。2009年4月24日に第1回「シルエット展」を渋谷区神宮前にあるPATER'S Shop and Galleryにおいて開催し、継続的に毎年行なっている。この対話(ダイアログ)と題した展覧会の特徴は、高橋庸平が1人のクリエイターを選び2人展という形式で対比できるように展示し、その考えや表現の違いが明らかになるよう配慮されている。それを対話(ダイアログ)と位置づけている。その選ばれた作者は第1回が伊藤彰剛(シルエット)、第2回末房志野(プリミティブとシンプル)、第3回高橋真理(メッセージ)、第4回小川雄太郎(ポスター)、第5回御法川哲郎(ポスターの機能と表現)、第6回千田昇平(生命の視点)と続いている。

今までにぼくは2人で開催する2人展を多く見てきたが、あまり魅力的なものもなかった。個性のぶつかり合いや主張の違いなどがあれば良いのだが、ほとんどが仲良しごっここの覇気のない、ただ並べてあるだけのものだった。そこには表現の罅迫り合い、互いに激しく競い合う気迫のこもったものはなかった。高橋庸平からこの企画の話聞いた時に、ほとんど期待はしていなかった。ところが六年間定期的に展覧会を見ると、そこには新たな地平が浮かび上がってきた。それは高橋庸平が刺激され大きく変化していく姿を垣間見ることができたからだ。一方、声をかけられた相手からも確かな技術力を持って対峙しようと試みる姿が、そこにあった。ということは確かに今まで見なかった精神の高ぶりが作品制作に現れ出ていることも明らかだった。

いったい何を対話(ダイアログ)しているのか、それは何なのか?疑問として登場してきた。ぼくたちは1人では生きていない、つまり刺激あったり影響を与えたり、それらを受けたりするやり取りの間の質の問題に突き当たった。その両者の意識の高さが重要で、これを適当で曖昧にすれば、この魅力は半減する以下の結果になってしまう。この緊張感のある表現者の言葉にならない感覚世界の放出力が問われる。しかしそんななかで高橋庸平は相手の能力までも飲み込んでしまいそうな勢いで、ダイアログ展を繰り返して行なった。

2012年5月の第4回展のカタログに「庸平君、雄太郎君への秋山孝10の質問」と題したQ&Aを試みた。そのQ&Aの質問「庸平君は対話というタイトルでポスターをテーマにしたのは何故ですか?」と質問した。彼はこう答えた「対話とは向かい合って話し合うことであり、一対一でのコミュニケーションです。独り言をつぶやくより、また大勢で会話するよりも、発言に責任感が生まれ、より深い思考ができるので価値のあるコミュニケーションだと考えています…」そこで言っているように「責任感」「より深い思考」「価値あるコミュニケーション」という大切な対話の基本姿勢が見られる。これを見失うとこの継続はまったく魅力を失ったものになる危険を孕んでいる。しかし今までの展覧会を見ると伊藤彰剛、末房志野、高橋真理、小川雄太郎、御法川哲郎、千田昇平らは、高橋庸平に対して怒りを持って対決しているように、一瞬垣間見えるときがあった。それこそがこの展覧会の最大の魅力だと思ふ。怒りこそエネルギーとなって、思考の深さと表現の声を創りだしている。

今までは一対一の対話(ダイアログ)展であったが、APMで行なう「イラストレーション・ダイアログ 6年間の試み」展は、それとは異なる。一対六の対話(ダイアログ)だ。そこでさらに見えてくるものは何なのか?ぼくにはわからない。おそらく大爆発があり、大議論へと進んでいくのではないだろうか。その創作者魂の一端を垣間見てほしい。そこには魅力的な表現と言葉の応酬が待っている。

二人展企画「イラストレーション対話展」を振り返る

高橋庸平

東京工科大学・助教
多摩美術大学・非常勤講師

● はじめに

2009年4月、渋谷区神宮前にあるペーターズショップアンドギャラリーにおいて、私は「イラストレーション対話展」と題した企画を始めた。実行するにあたって同級生や先輩に声をかけ、相手に即したテーマを決め、二人展を開催した。最初の頃は突発的な二人展という印象で、イラストレーション対話というコンセプトに対して理解が得られなかった。継続して開催していくうちに徐々に形になり、2015年5月には第7回目を開催する。そして、これまでの軌跡を振り返って本企画の意義を検証する機会を得た。それが秋山孝ポスター美術館長岡（APM）の展覧会『「イラストレーション・ダイアログ」展 6年間の試み』である。

● なぜ「対話」なのか

なぜ「イラストレーション対話展」というタイトルをつけたのか。対話とは「向かい合って話すこと。相対して話すこと。二人の人がことばを交わすこと。（広辞苑第六版より）」であり、二人ということが基本ユニットとなるからだ。

作品は会場に展示されることによってメッセージを語りかけている。展覧会の魅力は、それを聴いて理解するところにあると私は考える。二人の作品が展示されることによって、二人の声からは異なった考えや主張がされている。まるで対話しているかのようだ。

ブリタニカ国際大百科事典によると「広義に二人以上の人物感の思考の交流をいい、広く文学的表現法として用いられるが、特に哲学では問答によって哲学的主題を追求していく形式。」と書かれているように、哲学的な問答の形式を取り入れて「作品を通して行なう対話」こそが本企画の核である。

● 何を対話しているのか

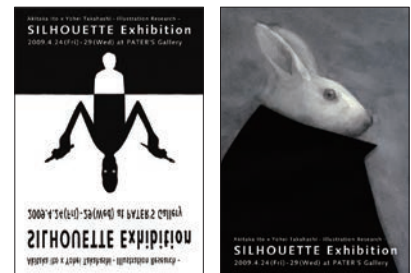
対話内容は、出品者として声をかける相手を決めた時点で必然的に決まった。それは、対話相手が自分にはないものを持っているからである。各回のテーマは以下の通りである。

- 第1回 「シルエット」(2009年4月 / 伊藤彰剛)
- 第2回 「プリミティブとシンプル」(2010年5月 / 末房志野)
- 第3回 「メッセージ」(2011年5月 / 高橋真理)
- 第4回 「ポスター」(2012年5月 / 小川雄太郎)
- 第5回 「ポスターの機能と表現」(2013年5月 / 御法川哲郎)
- 第6回 「命の視点」(2014年5月 / 千田昇平)

各回にテーマ設定をしているのは、私自身が多摩美術大学大学院(修士過程)でイラストレーション研究グループに在籍したこと、同大学での副手と助手を経験したことがきっかけである。イラストレーション研究グループでは、個々が創作における研究テーマを掲げ、各テーマの根源となる歴史や作家について研究をしながら理解を深め、創作テーマおよび作品の自己分析のための指針としている。私はこの研究グループで、修了後も創作・研究し続けるための



PATER'S Shop and Gallery エントランス / 2014



「シルエット」展 DM / 2009
左：高橋庸平、右：伊藤彰剛



「シルエット」展 会場風景 / 2009



「シルエット」展 会場風景 / 2009

基盤を得た。そして同様の基盤を持つ先輩、同級生、後輩から刺激を受けながら活動を続けてきた。対話するためのテーマが必然的に決まってくるのは、それぞれの対話相手が各自の創作・研究のテーマを持っているからである。内容は共通点の模索から始まり、研究テーマの比較、ポスターについて、そして物事に対する視点にまで及ぶ。さまざまな角度から対話を行ない、回を重ねるごとに検証を繰り返してきた。

対話相手とテーマが決まると、それぞれの創作と研究の内容に対する意識が強くなる。最初は共通点を探し、次第に相違点が浮かび上がり、それらは時に予想を超えた発見へと繋がる。次章では、6年間の体験を追いながら「イラストレーション対話展」を振り返る。

● 6年間の試みを振り返る

・ 第1回「シルエット」伊藤彰剛（2009年4月24日～29日）

「イラストレーション対話展」の始まりとなる展覧会である。当時はまだ「イラストレーション対話展」というタイトルではなく、サブタイトルとして「イラストレーション研究」という言葉を使っている。対話相手の伊藤彰剛は、多摩美術大学美術学部グラフィックデザイン学科での同級生であり、卒業後も交流を持ち続けていた。とはいえ当時では、交流といっても切磋琢磨と呼べるものではなかった。そこで、創作・研究活動のコミュニケーションを密にしたいという思いから、二人展を企画した。

展覧会テーマは「シルエット」である。伊藤は水彩による動物を擬人化した幻想的な描写表現に、デザインを意識して体の部分に切り紙を用いる実験をしていた。私は修士課程から「イラストレーションと文字の関係」をテーマとしており、モノクロの絵と文字（イラストレーションとコピー）を組み合わせた作品を作っていた。絵が記号化・抽象化された文字は、シルエット表現との相性が良かったのである。このような現在の創作に対する考えを語り合うことで、二つの全く異なる表現を結びつける言葉としての「シルエット」に至った。

・ 第2回「プリミティブとシンプル」末房志野（2010年5月21日～26日）

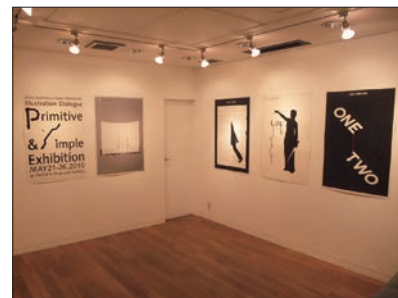
作品による対話をコンセプトとして、展覧会タイトルに「イラストレーション対話」という言葉が登場する。出品者の末房志野は、多摩美術大学イラストレーションクラスの先輩であり、東京藝術大学でプリミティブ・イラストレーションをテーマに博士号を取得している。博士課程の受験に失敗していた私は、博士課程で追求されたイラストレーション研究と表現に肌で触れたいと考えていた。また私は当時、イラストレーションと文字を組み合わせたモノクロ表現からの展開として、削ぎ落とされたシンプルな造形を追求していた。そんな中、私が目指していたシンプルな造形とプリミティブ表現との間に近いものを感じ、その比較を狙った。

展覧会のテーマは「プリミティブとシンプル」である。初回に行なった共通点を模索に対して、第2回目は研究テーマを併記した。始めは共通点を探っていたが、作品や研究内容を知ることによって相違点の方がより強く感じられるようになった。プリミティブは「原始・根源・素朴」で、生まれ持った根源的なものである。対してシンプルは「単純・簡単・簡素」で、複雑な情報の中から派生的に生まれたものである。そうした相違点の発見があった。

この回には、ゲストに恩師である多摩美術大学の秋山孝教授を迎えて、トークショーも実施した。内容は、二人展を継続する意義、ポスターを展示すること、研究や表現を迫り及ぶこと、「対話」とは何かなど、企画の根幹についての曖昧だった部分が明るみに出される形となった。



「プリミティブとシンプル」展 DM / 2010
左：高橋庸平、右：末房志野



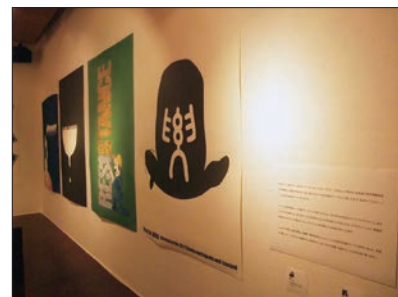
「プリミティブとシンプル」展 会場風景 / 2010



「プリミティブとシンプル」展 トークショー
2010年5月23日



イラストレーション対話展 3 DM / 2011
左：高橋庸平、右：高橋真理



イラストレーション対話展 3 会場風景 / 2011

・ 第3回「メッセージ」高橋真理 (2011年5月6日～11日)

高橋真理は、大学院でポスター作家のレイモン・サヴィニャック(1907～2002/フランス)のユーモア表現を研究し、社会問題を扱ったイラストレーションポスターを制作していた。暗くながちな風刺的テーマを愛嬌あるキャラクターによって表現している。私も大学院修了後に制作した大気汚染のポスターでの受賞をきっかけとして、自主制作として社会問題を扱っていた。第3回目は同じ社会問題を扱った表現の比較を行なった。

テーマは「メッセージ」である。イラストレーションは、世界規模の問題から個人的な出来事まで、また学術的な説明から感情の表現までを伝えることができる魅力的な手段である。このように表現の幅が広いからこそ、同じ内容を表現しても、発信されるメッセージは作者によって全く異なる。それが個性であり、人の心に訴える要素となることを強く意識する結果となった。

・ 第4回「ポスター」小川雄太郎 (2012年5月18日～23日)

小川雄太郎は、修士課程で「文化ポスターにおけるメタファー」をテーマとして、世界の文化ポスターについて研究していた。そして制作においては、シンプルな色と形による線の表現に特徴がある。ワルシャワ国際ポスタービエンナーレに参加するためポーランドに同行するなど、ポスターをきっかけとした縁がある。修了後にテキスタイルデザイン専攻の副手として勤務してからも、度々意見交換の機会があった。そこでも後輩でありながら忌憚ない意見を交わしてくれる仲間でもある。こうした繋がりから、これまでとは違った形での「対話」ができると考えた。

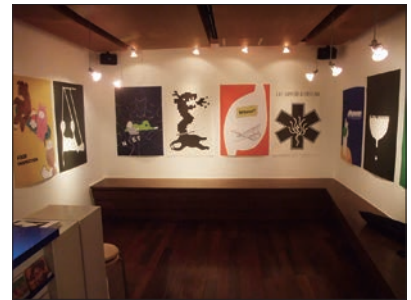
テーマは「ポスター」とした。ここで展示作品の枠組みとしてポスター形式を意識した。イラストレーションはただ絵を描くだけで完結はしない。情報を伝えるために描かれるべきであり、その方法としてメディアを通す。メディアには制約があり、他者が関わることで一人ではできない表現が生まれることがある。これらポスターに対する思いを共有したいという欲求を、小川は文化ポスター、私は社会ポスターの制作を通して発表した。また、ポスター様式への意識に起因していると思われる、シンプルな造形の比較にも焦点が当たった。

第4回目では、トークショーを行なうにあたって「庸平君、雄太郎君への秋山孝10の質問」と題した事前質問と回答を行なっている。テーマである「ポスター」について、それぞれの表現について、大学での仕事と創作活動についての質問と回答を原稿にして、展覧会カタログにも掲載した(p. A19--8 参考資料参照)。トークショーでは、これらの原稿を基盤として、これまでの対話展を振り返りつつ、展示作品を通して各自の創作についての考えが、より具体的に話し合われた。

・ 第5回「ポスターの機能と表現」御法川哲郎 (2013年5月17日～22日)

御法川哲郎は、私が修士課程に在籍時、多摩美術大学グラフィックデザイン学科の助手であり、後に同研究室に在籍した際の先輩でもある。大学で行なったの様々なイラストレーション研究についての情報を共有してきた。創作・研究においては、ポーランドポスターの写実描写を研究しており、また同様の描写表現を追求している。本企画を始めてから初の逆指名を受けたこともあり、この頃には「イラストレーション対話展」が軌道に乗ってきたと実感していた。

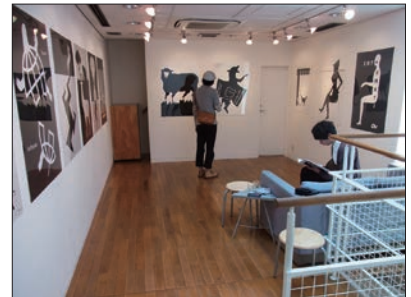
テーマは「ポスターの機能と表現」である。前回に引き続いてポスターをテーマに据えた。自己表現だけでなく、イラストレーションとしての役割にも焦点を当てている。図と文字によって情報を伝える機能と一枚の紙にアイデアや造形を集約する表現。機能と表現の両立はポスター



イラストレーション対話展3 会場風景 / 2011



イラストレーション対話展4 DM / 2012
左：高橋庸平、右：小川雄太郎



イラストレーション対話展4 会場風景 / 2012



イラストレーション対話展4 トークショー
2012年5月20日



イラストレーション対話展5 DM / 2013
左：高橋庸平、右：御法川哲郎

制作の魅力のひとつである。ただ描くことの喜びを表わすだけでなく、機能と表現の間で感じる創作活動における葛藤などがテーマの核となった。

トークショーでは、同年6月に秋山孝ポスター美術館長岡 (APM) で開催された「ポーランドポスターの巨匠 in 長岡」展や、私2012年に参加したメキシコ国際ポスター・ビエンナーレの報告などを交えて、世界のポスターの現状やその魅力を語りつつ、個々の創作表現に迫った。

・ 第6回「命の視点」千田昇平 (2014年5月16日～21日)

千田昇平は、多摩美術大学美術学部グラフィックデザイン学科での同級生であり、学生時代から今まで一貫したリアリズム表現で制作し続けている。ポスターサイズで描かれていても文字がなく、何を語っているかも分からない。それでも独特の描写によって質感・空間が表現されることで鑑賞者を惹きつける。私の現在の制作スタイルや目標とは真逆でありながらも、作家としての魅力を感じている。

テーマは「命の視点」とした。人や動植物などの生物を組み合わせて描写する千田に対し、私は主に地震・原発にまつわる人間行動を表現した。そこには生命に対する視点の大きな隔りがあるように感じられた。暗くグロテスクに見えて優しい表現に対して、明るいようで風刺的な表現を並べて、その隔りや比較を試みた。トークショーでは、これまでの対話展を振り返りつつ個々の作品に触れ、それぞれの個性について話し合われた。

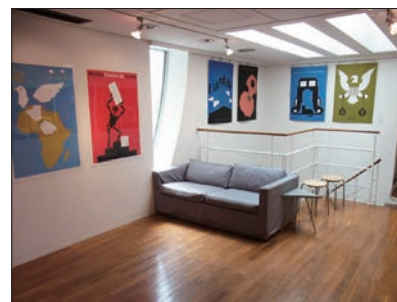
・ 「イラストレーション・ダイアログ」展 6年間の試み (2015年4月18日～6月29日)

「イラストレーション・ダイアログ」展 6年間の試み では、これまでの対話相手に「対話前・対話後」をテーマとして、イラストレーション対話展で出品した当時の作品と、その後に制作した近作の出品を依頼した。「対話」することで、表現の変化が生まれるかを検証することが目的である。また、私自身が制作してきた「イラストレーション対話展」第1回から第6回までの各出品作品を展示している。私自身の作品からは、造形、色使いをはじめ、表現の変遷を見て取ることができる。「イラストレーション対話展」だけを創作活動としているわけではないが、相手への意識や展示内容を受けての発見や反省など、少なからず影響を受けている。改めて6年間を振り返ってみると、「対話」というコミュニケーションによって他者と関わることで、自身の表現が形作られているように実感している。

● 今後の展望

イラストレーション対話展は、各自の創作・研究テーマを持った個性的な相手によって生まれる、刺激的な創作・研究活動を6年間続けてきた。それぞれの個性がぶつかり合うことで「作品を通して行なう対話」を繰り返してきた。また、各回にトークショーを実施することで、展示会の企画・運営、そして出品しているだけでは気付かない、客観的な視点を得たことも貴重な機会となった。

この6年間の試みは、創作活動において表現が相互関係によって影響し合う、という得難い対話であった。この企画を継続することにより、対話相手と私の双方にとってさらに価値のある対話になると信じている。



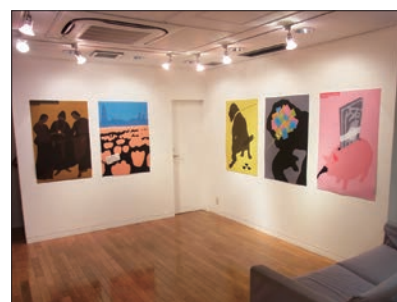
イラストレーション対話展 5 会場風景 / 2013



イラストレーション対話展 5 トークショー
2013年5月18日



イラストレーション対話展 6 DM / 2014
左：高橋庸平、右：千田昇平



イラストレーション対話展 6 会場風景 / 2014



イラストレーション対話展 6 トークショー
2014年5月17日

イラストレーション対話展4 トークショー
秋山孝 × 小川雄太郎 × 高橋庸平
「庸平君、雄太郎君への秋山孝10の質問」

日時:2012年5月20日[日]16:00~
場所:ペーターズショップアンドギャラリー



Q01- 庸平君は「対話」というタイトルで「ポスター」をテーマにしたのは何故ですか。その理由をお聞かせください。

A01:庸平-- 「対話」とは向かい合って話し合うことであり、1対1でのコミュニケーションです。ひとり言をつぶやくより、また大勢で会話をするよりも、発言に責任感が生まれ、より深い思考ができるので価値のあるコミュニケーションだと考えています。そして僕たちはイラストレーションを描いているので、ビジュアルを通してコミュニケーションができます。だから二人展のコンセプトを作品で語り合うこととして、タイトルに「対話」という言葉を用いました。「ポスター」をテーマにした理由は、イラストレーターが作品を発表する上でポスターは魅力的なメディアである、ということを示したいからです。イラストレーションはメッセージを伝えるためにメディアを通します。そんなメディアのひとつに「ポスター」があります。印刷メディアであるポスターは、より広範囲でスピード感のある映像や電子メディア押され、また印刷物であるイラストレーションは、絵画としては軽んじられているように感じています。しかし僕にとっては、ポスターに描かれたイラストレーションは、その機能と役割も魅力として加わり、芸術作品と同等の価値をもっていると考えています。そして実際に評価を受け、美術館に收藏されているポスターもあります。そんなイラストレーションポスターの価値を周りの人たちが理解してもらうためには、ポスターの魅力や必要性に対する自分なりの考えを述べる必要があると感じたので「ポスター」をテーマとしました。また、小川君とはワルシャワポスタービエンナーレに同行するなど、ポスターで繋がる縁があり、後輩でありながら忌憚なくポスターについての意見を交わしてくれました。そんな貴重な相手と出会えたこともテーマ設定のきっかけです。

Q02- 雄太郎君は、なぜ庸平君と二人展を受けたのですか。その理由をお聞かせください。

A02:雄太郎-- 庸平さんは普段からポスターについて話したり、色々と勉強をさせてもらっています。今回の展覧会を通して、自分達が考えていることをイラストレーション・スタディーズの人達にも伝えられたらと思います。

※イラストレーション・スタディーズ…多摩美術大学の秋山孝教授が主催するイラストレーション研究組織。

Q03- その結果なにを期待したのですか。

A03:庸平-- この展覧会で求めているのは、より深く新たな発見です。対話によって、今まで気付けなかった共通概念、または相違点を見つけたいです。展覧会という緊張感のある場で己の主張をぶつけ合うことで、より深い対話ができると考えています。特に今回は「ポスター」をテーマとしているので、ポスターに対する自分なりの考えをはっきりさせたいと考えています。また、来場者に僕たちの対話を見せることで、ポスターの魅力や伝えたいと考えています。周りの環境からもイラストレーションポスターの世界をもっと面白いものにしたと目論んでいます。

A03:雄太郎-- 若いイラストレーターでポスターに興味を持つ人が少ないように感じるので、同世代で観ている人が増えることを期待します。

Q04- 「イラストレーションポスター」のどこが魅力的なのですか。

A04:庸平-- 制約を乗り越えて生まれる表現に魅力を感じています。何の勉強もしていなかった最初の頃は、重厚な絵画とは違った軽快な紙メディアというお洒落さに惹かれていました。そして表現も自由奔放な世界に見えていました。でも実際は、目的や言語、そして文化などの制約がたくさんあり、とても不自由でした。名作と呼ばれるポスターは、これらの制約を乗り越えたコミュニケーションがあるからこそ名作なのだと思われました。

A04:雄太郎-- ポスターは基本的に他人の宣伝をしています。人の宣伝をなぜ自分の絵であるのか、たまに不思議に思いますが、そこがポスターの面白いところだと思います。テーマや地域、予算や社会情勢などがデザインの条件となり自分一人だけでは生み出せない表現が生まれることがあります。イラストレーションポスターにおいて、そういった副次的な要因により名作が生まれた事例は多く、そこが魅力だと思います。

Q05- どんなテーマで何を伝えたいのですか。そのメッセージとは?

A05:庸平-- 僕は社会問題をテーマとして事実を伝えるだけでなく、記憶を風化させないための象徴としてポスターが記録されていくことを目指しています。物理学者の寺田寅彦(1878-1935)は「津波と人間」という随筆を残しています。これは1933年に発表されたものですが、昨年起こった東日本大震災の教訓としても全く同じことが言えます。「世代が変わることによっての災害による惨劇を忘れ、同じ過ちを繰り返すのを止めたいならば『残る唯一の方法は人間がもう少し過去の記録を忘れないように努力するしかない』と言っています。ポスターがメッセージを伝えるのではなく、保存されて記録される。これはポスターにできる、もうひとつの役割なのではないでしょうか。

A05:雄太郎-- 僕がポスターのテーマを選ぶのは、主に文化ポスターです。展覧会や音楽、映像などに関わるものです。対象となる作品やイベントの特徴と雰囲気や伝えたいと考えています。ポーランド人デザイナー、ヤン・レツォは「文化ポスターは視覚的なあらすじである」と言いましたが、それを狙っています。

Q06- 庸平君は、なぜ作品を白黒で表現するのですか。色にもメッセージがあるのにそれを利用しないのは何故ですか。

A06:庸平-- 僕のポスター作品のほとんどは見立てを使った置換や融合など、伝えたいことを形に集約してメッセージを表現しています。集約された形を強調するために余分な形をそぎ落とし、なるべくシンプルな、白黒はっきりとした誠実なメッセージを送ろうとしています。歴史的に見れば、白黒のイラストレーションは表現よりも技術や経済的な理由で描かれていました。しかし、そこには形の受ける制約という魅力があります。まず2色で分割しなければならぬという不自由さによって造形は大きく影響を受け、新しい形を作り出そうと工夫して努力します。その形は、僕なりのアイデアが詰まった表現であると考えています。

Q07- 雄太郎君は、形と色をシンプルにするのは何故ですか。言い足らずになりませんか。

A07:雄太郎-- 身近な道具で描いた、単純な要素だけで内容の濃いものを作りたいと考えています。最近では自主制作ではなく実際に利用するポスターを作っているの、言い足らずにならないように気をつけています。そのために、以前よりメッセージを分かりやすくすることが増えました。

Q08- 二人とも大学で働きながら作品を制作していますが、その利点欠点を教えてください。

A08:庸平-- 利点のひとつは、創作する場として自由度が高い環境に身を置いていることです。もうひとつは学生連との関係から受ける刺激があることです。学生と話すこと、また教えることは自分の知識を再確認に繋がるので、創作の糧になっています。欠点は、大学は社会に対してあまりにも孤立した環境にある、ということです。そんな隔離された中で埋もれてしまうことを恐れています。だからこそ大学という組織を利用し、大学に身を置くことの価値を見出す必要があります。

A08:雄太郎-- 利点は先生方の話を日々聞けることです。欠点は、イラストレーションを社会の中で活躍させるという意識が希薄になりやすい点かもしれません。自分の研究とビエンナーレの中だけで収まるのではなく、実践の中で表現と技術を獲得していきたいです。

Q09- 今後、作品をどのように発展、展開していくか、その計画を聞かせてください。

A09:庸平-- 作品制作を続けられるような土壌を自ら作ることが目標です。ただポスターを作って発表し続けていても、ポスター制作の依頼が来て生活できるとは考えていません。この「対話展」もそうですが、ポスターを作り続ける為には、自らイベントを企画・運営する能力が必要であると考えています。理想とする自由な創作活動の場は自ら作らなければなりません。現実的に社会と作品をどう結びつけて経済へと発展させていくか。それが今後の課題です。

A09:雄太郎-- 街に貼られて利用されるポスターを制作し、その中でポスタービエンナーレでも評価されるポスターを制作していきたいです。技術面に関しては、タイポグラフィと印刷に対する知識を増やしたいです。また、ポスターだけに限定せずに様々なメディアでイラストレーションを描いていこうと考えています。

Q10- 創作と仕事の両立のポイントを説明してください。

A10:庸平-- 創作と仕事のバランス感覚を大事にしています。昼は仕事に入れ込み、家に帰ってからスイッチを切り替えて作品を作るのではなく、普段から常に創作を頭の片隅に残しています。そして忙しい環境に身を置いていることも創作には必要です。仕事をしている時の方が制作だけに打ち込んでいる時よりもアイデアが浮かぶことが多いからです。

A10:雄太郎-- 僕は、寝てる時にやる作業(描く)と元気がな時にやる作業(考える)を分けています。休日にアイデアを考えてエスキースを詰め、平日の夜に作業をします。

番外質問- 今回のために制作したポスターについて解説してください。

A:庸平-- ポスターは弱者のメッセージですら強く増幅し、見る人に襲いかかってきます。その力は時に社会をひっくり返すこともできます。そんなポスターのイメージに、強者の権力をかさに着る弱者をあらわす「虎の威を借る狐」ということわざを重ね合わせました。ポスターをくぐることでトラへと変身するキツネを描くことで、今回のテーマである「ポスター」の魅力や表現しました。

A:雄太郎-- 昨年大学院を出てから、初めて小さなカットのイラストレーションをいくつか描かせていただいたのですが、それまでポスターしか作っていなかったで、改めてポスターを作ろうとした時に本当に大きくなりました。こんなに大きいに同じように描いていいものかと考えました。この大きさはポスターの重要な特性の一つで、そのことを踏まえて描こうと思いました。「イラストレーションの巨人、それがイラストレーションポスターだ!」というメッセージです。絵は昔から好きだったゴヤの巨人のパロディです。



高橋庸平-01

[Title] 「イラストレーション・ダイアログ」展 6年間の試み
[Size] 1030 × 728 mm (B1)
[Technique] --- Offset printing
[Year] 2015
[Client] 秋山孝ポスター美術館長岡 (APM)
[Category] Culture

2009年4月から「イラストレーション対話展」と題した二人展を毎年開催している。秋山孝ポスター美術館長岡 (APM) での企画展「イラストレーション・ダイアログ」展 6年間の試みは、これまでを振り返り、意義を検証する機会となった。対話展では「対話」に「面と向かって行う対話」と「作品を通して行われる対話」の二つの意味を込めている。また他人と対話するとき、同時に自己葛藤 (自己との対話) もしている。ポスターにはルビンの壺を用いて、外と内の対話を表現した。そして横に繋がっていくことで、対話は続いていく。



高橋 庸平 Yohei TAKAHASHI

1981年 千葉県生まれ。2005年 多摩美術大学大学院デザイン専攻修了。同大学グラフィックデザイン学科助手を経て、現在、東京工科大学デザイン学部 助教、多摩美術大学 非常勤講師。／受賞:FUKUDAポスター大賞2005 一般の部 最優秀賞、第2回東京装画賞2013 アルジョウィゲンズ賞／国際参加展:ワルシャワ国際ポスタービエンナーレ、モスクワ国際グラフィックデザインビエンナーレ、メキシコ国際ポスタービエンナーレ、ラハティ国際ポスタービエンナーレほか

URL <http://www.yoheitakahashi.com>

02. 覆水盆に返らず - 福島第一原発事故

対話展6は地震や原発などの震災にまつわる人間活動をテーマとした。福島第一原子力発電所事故は2011年3月11日の東北地方太平洋沖地震による地震と津波の影響によって発生した、炉心溶融などによる放射性物質の放出をともなった事故である。この取り返しのつかない事故以来、生活環境や人々の心の中に変化が起きた。この教訓を忘れないためにも、事故の前後を一枚の絵にまとめた。

03. 所有者の責任

対話展6は地震や原発などの震災にまつわる人間活動をテーマとした。福島県二本松市のゴルフ場が放射性物質に汚染され、その除去と損害賠償を求めた仮処分申請があった。その際、東京電力は「原発から散った放射性物質は東電の所有物ではない。したがって東電は除染に責任をもたない」主張という主張をしていた。生み出した物に対する所有者の責任の所在について、考えさせられる出来事だ。犬のフンの始末は誰の責任か。

04. イラストレーション対話展6 「命の視点」

2009年からペーターズギャラリーで毎年行なっている「イラストレーション対話展」が6回目を迎えた。出品者それぞれの作品内容をふまえると、生命体や人間活動に対する意味ありげな雰囲気を感じ取ったため、今回はテーマを「命の視点」とした。ポスターは、花びらにトゲのあるバラと葉っぱにトゲのある、それぞれ奇妙なバラの対話である。

05. 定年

日本の義務定年は2013年度に60歳から61歳へと引き上げられた。1998年に55歳から60歳に引き上げられて以来の変更だ。また今後も段階的に引き上げが行われていく。ロボットのような働き者の日本人が、さらに自らの階段を積み上げて働いている。

06. 大気汚染

九州でPM2.5(微小粒子状物質)が発見された。これらはモンゴル・中国国境の砂漠からの黄色砂や車の排気物や工場などの煙が原因である。中国から風に乗って流されてくる大気汚染が日本全土を覆っていくのでは、という恐怖を感じる。

07. イラストレーション対話展5 「ポスターの機能と表現」

ペーターズギャラリーで2009年から毎年行なっている「イラストレーション対話展」が5回目を迎えた。テーマは「ポスターの機能と表現」とした。図と文字で情報を伝える機能と造形やアイデアの集約が生み出す表現。これら機能と表現の両立をヴィーナスの後ろ姿で表現した。ヴィーナスは腰巻がずり落ちていてお尻が少し出ている。気になってチラチラと見ってしまうそんな場所に文字を入れて展覧会の情報を伝えた。



高橋庸平-02

[Title] 覆水盆に返らず - 福島第一原発事故
[Size] 1030 × 728 mm (B1)
[Technique] --- Inkjet printing
[Year] 2014
[Client] PATER'S Shop and Gallery
[Category] Social



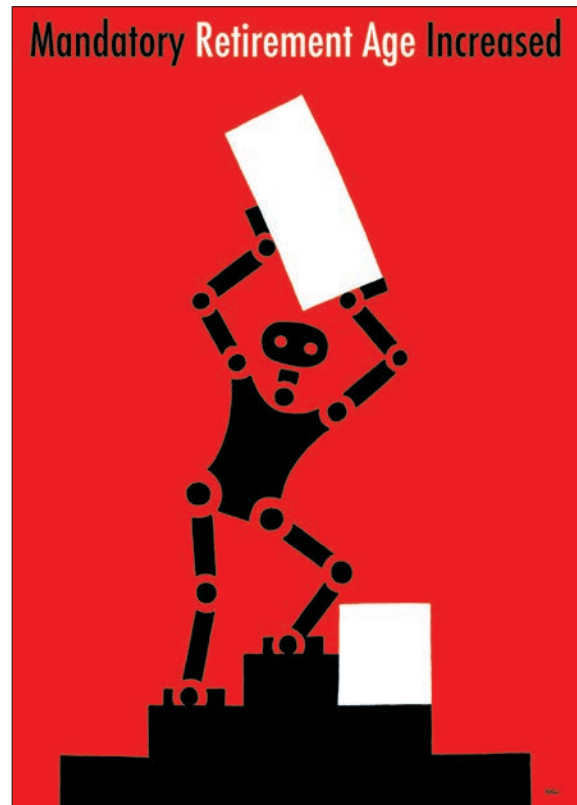
高橋庸平-03

[Title] 所有者の責任
[Size] 1030 × 728 mm (B1)
[Technique] --- Inkjet printing
[Year] 2014
[Client] PATER'S Shop and Gallery
[Category] Social



高橋庸平-04

[Title] イラストレーション対話展6 「命の視点」
 [Size] 1030 × 728 mm (B1)
 [Technique] --- Offset printing
 [Year] 2014
 [Client] PATER'S Shop and Gallery
 [Category] Culture



高橋庸平-05

[Title] 定年
 [Size] 1030 × 728 mm (B1)
 [Technique] --- Inkjet printing
 [Year] 2013
 [Client] PATER'S Shop and Gallery
 [Category] Social



高橋庸平-06

[Title] 大気汚染
 [Size] 1030 × 728 mm (B1)
 [Technique] --- Inkjet printing
 [Year] 2013
 [Client] PATER'S Shop and Gallery
 [Category] Social



高橋庸平-07

[Title] イラストレーション対話展5 「ポスターの機能と表現」
 [Size] 1030 × 728 mm (B1)
 [Technique] --- Offset printing
 [Year] 2013
 [Client] PATER'S Shop and Gallery
 [Category] Culture

08. 地震・津波

地震をテーマに制作した。2011年に起きた東日本大震災では、一次災害である地震から始まる、二次災害の火災や津波への連鎖に強い衝撃を受けた。そこで地球を亀の甲羅に、また津波を亀の脚に見立て、そのアンバランスさで地震災害が引き起こす混乱を表現した。

09. イラストレーション対話展4 トークショー

イラストレーション対話展4のトークショーのためのポスター。展覧会ポスターの虎と狐の関係を逆転させた。ポスターの力を使えば、狐を虎にするだけでなく、虎を狐にすることもできる。ポスターの様々な可能性を表現した。

10. イラストレーション対話展4 「ポスター」

2009年からペーターズギャラリーで毎年行なっている「イラストレーション対話展」が4回目を迎えた。テーマは「ポスター」である。ただイラストレーションを描いて完結するのではなく、それぞれが作品制作において掲げるテーマを主として、それぞれのポスターに対する考えを表現した。「虎の威を借る狐」のこたわぎを借りて、ポスターを潜ることで虎に変身する狐を描き、ポスターの可能性を表現した。

11. 情報化社会

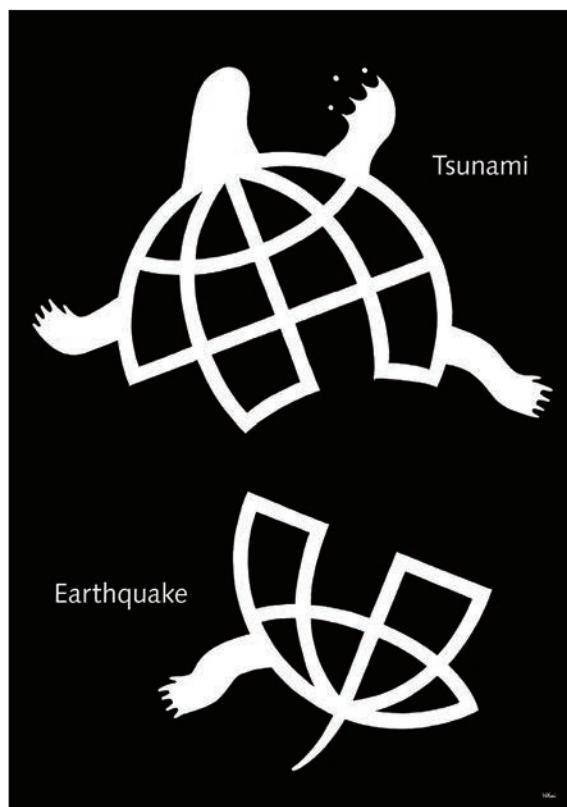
情報化社会をテーマに制作した。情報化社会のデジタル化部分をドットで表現することで、様々なシチュエーションを描いた。熊の身体が技術革新によって恐竜のように大きくなっている。すると星にも届くようになる、という希望を表わした。

12. 情報化社会

情報化社会をテーマに制作した。情報化社会のデジタル化部分をドットで表現することで、様々なシチュエーションを描いた。ゲームをしている熊の頭が火を噴く怪獣になっている。ゲームばかりしていると現実と空想の境目がなくなり、凶暴性が増すのではないかと、という危険性を表わした。

13. イラストレーション対話展3 「メッセージ」

2009年からペーターズギャラリーで毎年行なっている「イラストレーション対話展」が3回目を迎えた。テーマは「メッセージ」である。社会問題という共通テーマによる切り口の違いを見る事で、イラストレーションのメッセージを伝えるという役割を掘り下げた。ポスターには羽がポスターになっている鳩を描くことで、メッセージを伝える「ポスターの伝書鳩」を表現した。



高橋庸平-08

[Title] 地震・津波
[Size] 1030 × 728 mm (B1)
[Technique] --- Inkjet printing
[Year] 2012
[Client] PATER'S Shop and Gallery
[Category] Social



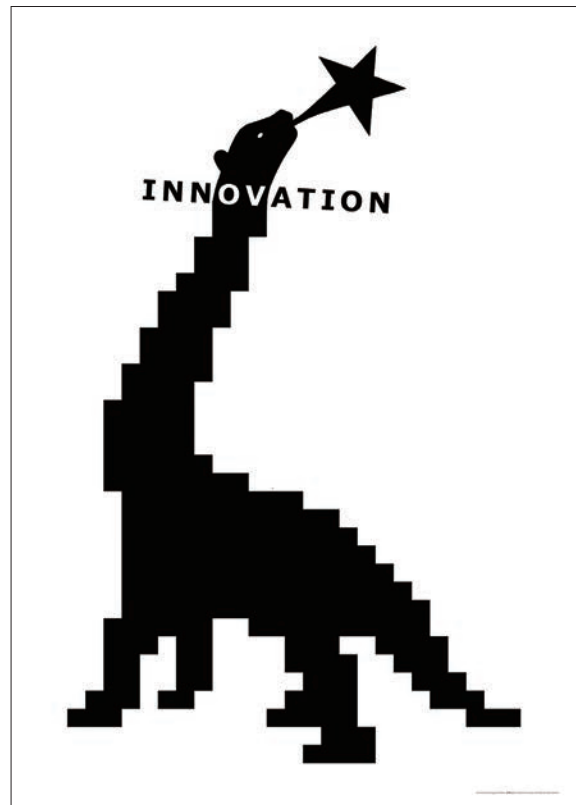
高橋庸平-09

[Title] イラストレーション対話展4 トークショー
[Size] 1030 × 728 mm (B1)
[Technique] --- Inkjet printing
[Year] 2012
[Client] PATER'S Shop and Gallery
[Category] Culture



高橋庸平-10

[Title] イラストレーション対話展4 「ボスター」
 [Size] 1030 × 728 mm (B1)
 [Technique] --- Offset printing
 [Year] 2012
 [Client] PATER'S Shop and Gallery
 [Category] Culture



高橋庸平-11

[Title] 情報化社会
 [Size] 1030 × 728 mm (B1)
 [Technique] --- Inkjet printing
 [Year] 2011
 [Client] PATER'S Shop and Gallery
 [Category] Social



高橋庸平-12

[Title] 情報化社会
 [Size] 1030 × 728 mm (B1)
 [Technique] --- Inkjet printing
 [Year] 2011
 [Client] PATER'S Shop and Gallery
 [Category] Social



高橋庸平-13

[Title] イラストレーション対話展3 「メッセージ」
 [Size] 1030 × 728 mm (B1)
 [Technique] --- Inkjet printing
 [Year] 2011
 [Client] PATER'S Shop and Gallery
 [Category] Culture

14. JAL再編

2008年のリーマン・ショックをきっかけに、日本航空(JAL)が経営破綻に陥り、2010年1月には会社更生法適用を申請する。国土交通省が設置した有識者委員会や民主党政権による政府の積極的関与などが行なわれた。再建のために公的資金(税金)が使われている様子や、TAX(税金)でつなぎ止められたちぎれた飛行機を描くことで表現した。

15. オバマ大統領 (Black in White)

2009年1月に、バラク・オバマ第44代アメリカ合衆国大統領に就任した。黒人初の大統領となる。人種差別が主要な問題となっているアメリカ合衆国において、これは象徴的な出来事である。イラストレーションは辞書の「white」のページに入っていく黒い人を描くことで、白人社会の中に飛び込んでいく黒人を表現した。

16. プリミティブとシンプル展 - イラストレーション対話

2010年5月、イラストレーションによる対話の場としての展覧会を開催した。テーマは「プリミティブとシンプル」である。プリミティブの「原始、根源、素朴」とシンプルの「単純、簡単、簡素」。それぞれの共通点と相違点を探った。ポスターは、プリミティブの「P」を射抜こうとするシンプルの「S」で形作った弓矢を描いた。

17. 年金記録問題

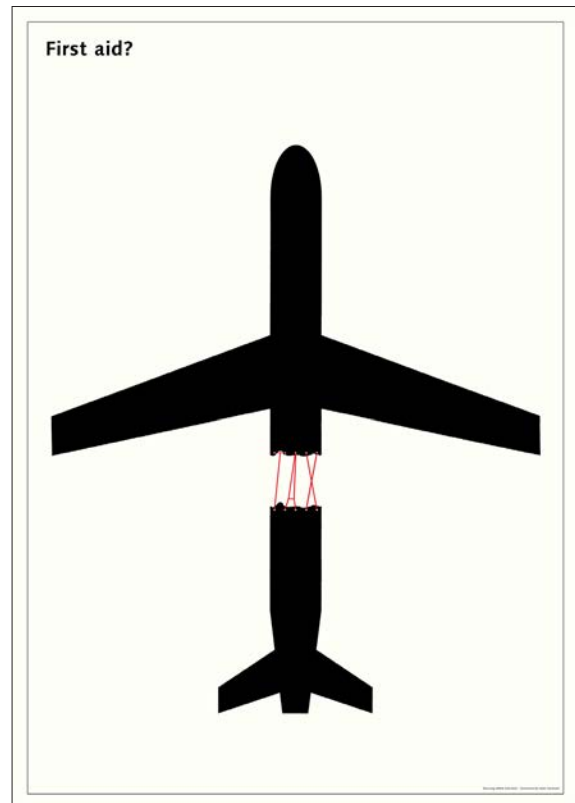
社会保険庁のオンラインデータにミスや不備が多いことが、2007年2月以降、国会審議中に明らかになった。国会やマスコミによって社会保険庁の年金記録のずさんな管理が批判された。機械を使った合理化のつもりが、逆効果となった。「RECORD」の文字が機械を通ることによって他の文字に変わっている。

18. 教科書改訂

「ゆとり」や「学力向上」など定まらない主題によって内容が増減したり、言い回しに対する見解の違いで衝突する、教科書は非常にデリケートな書籍である。二宮金次郎像が教科書(textbook)の重さに耐える様で、教科書の重みを表現した。

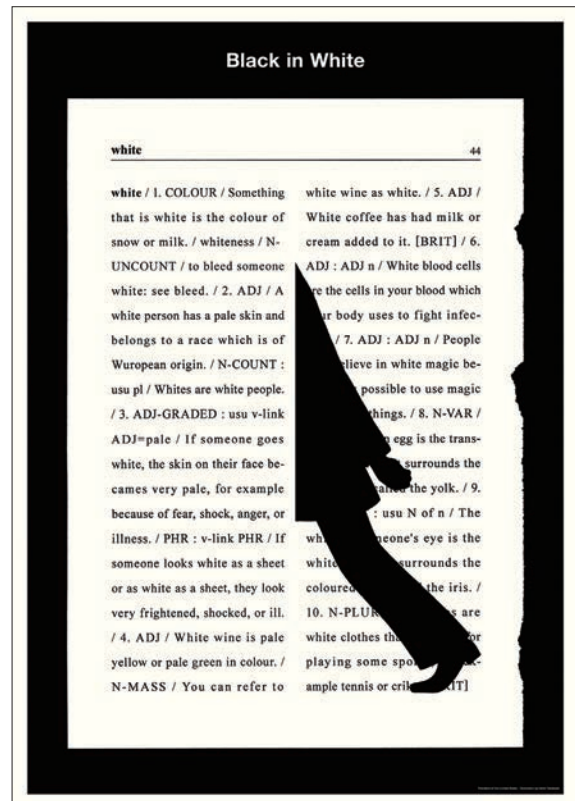
19. 「シルエット」展

2009年4月、ペーターズショップアンドギャラリーで二人展を行なった。ただ展示発表を行なうだけでなく、イラストレーションの表現についてテーマをもって掘り下げる実験的な展覧会を試みた。今回はテーマを「シルエット」とした。影で一生懸命に創作活動をする姿を描いた。



高橋庸平-14

[Title] JAL再編
[Size] 1030 × 728 mm (B1)
[Technique] --- Inkjet printing
[Year] 2009
[Client] PATER'S Shop and Gallery
[Category] Social



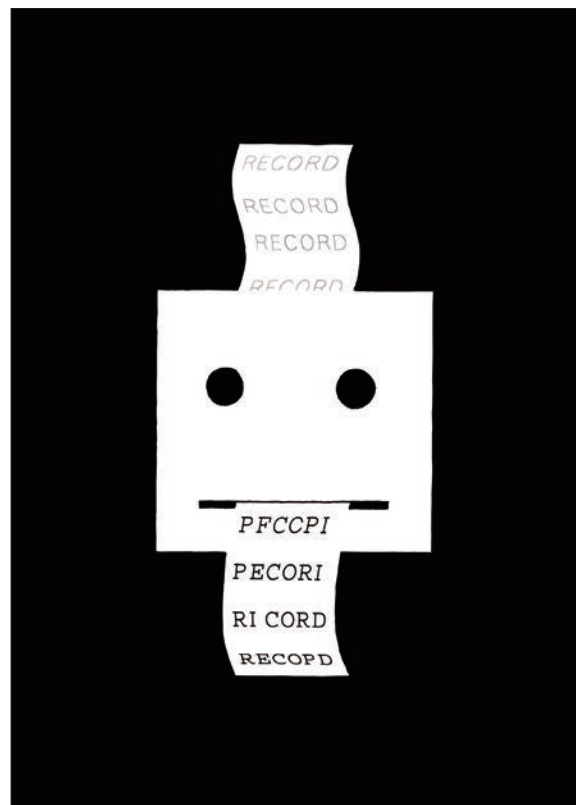
高橋庸平-15

[Title] オバマ大統領 (Black in White)
[Size] 1030 × 728 mm (B1)
[Technique] --- Offset printing
[Year] 2009
[Client] PATER'S Shop and Gallery
[Category] Social



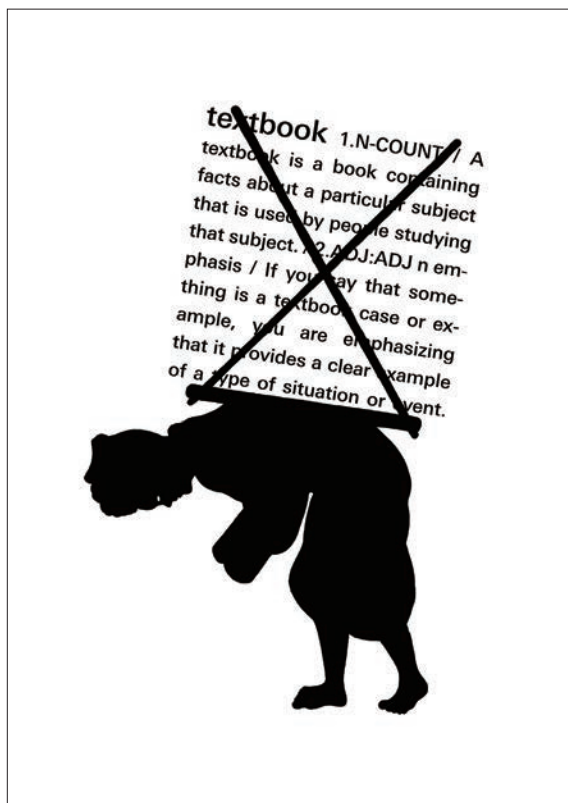
高橋庸平-16

[Title] プリミティブとシンプル展 - イラストレーション対話
 [Size] 1030 × 728 mm (B1)
 [Technique] --- Offset printing
 [Year] 2010
 [Client] PATER'S Shop and Gallery
 [Category] Culture



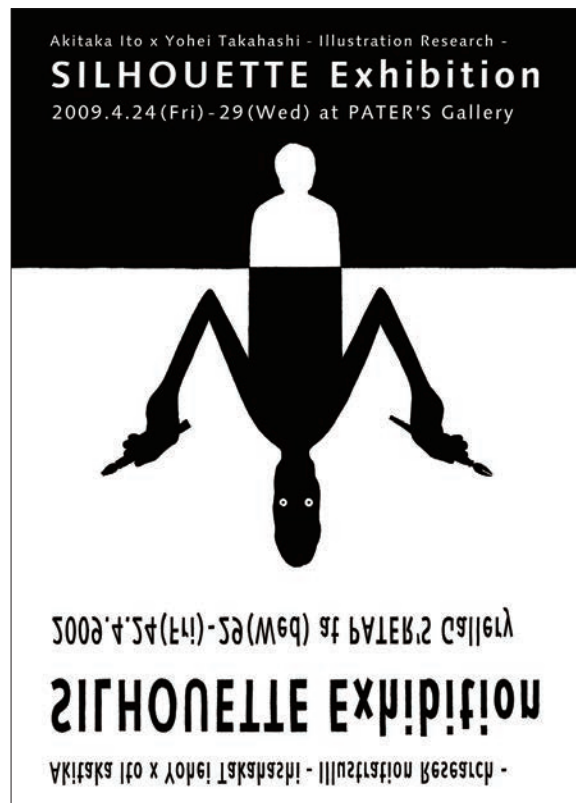
高橋庸平-17

[Title] 年金記録問題
 [Size] 1030 × 728 mm (B1)
 [Technique] --- Inkjet printing
 [Year] 2009
 [Client] PATER'S Shop and Gallery
 [Category] Social



高橋庸平-18

[Title] 教科書改訂
 [Size] 1030 × 728 mm (B1)
 [Technique] --- Inkjet printing
 [Year] 2008
 [Client] PATER'S Shop and Gallery
 [Category] Social



高橋庸平-19

[Title] 「シルエット」展
 [Size] 1030 × 728 mm (B1)
 [Technique] --- Inkjet printing
 [Year] 2009
 [Client] PATER'S Shop and Gallery
 [Category] Culture



伊藤 彰剛 ITO Akitaka

1979年 神奈川県鎌倉市生まれ。2003年 多摩美術大学グラフィックデザイン学科卒業。多摩美術大学非常勤講師。東京イラストレーターズ・ソサエティ(TIS) 会員。受賞:ターナーACRYL AWARD 2004 大賞。入選:TIS公募(第4回・第5回・第6回・第7回)、グラフィックアート『ひとつぼ展』(第30回)、国際参加展:ワルシャワ国際ポスタービエンナーレ(第22回、第24回)、ラハティ国際ポスタービエンナーレ(第18回、第19回)、Golden Bee モスクワ国際グラフィックデザインビエンナーレ(第9回、第10回)、世界ポスタートリエナーレトヤマ(第10回)

URL <http://www.akitakaito.com/>

01. AKITAKA ITO ILLUSTRATION EXHIBITION (HORSE)

馬の表情はどこか寂しくひかれるものがあります。自分自身の感情を光や影、空間といった要素を大切に表現しました。一見、ネガティブに見える世界観の中に僅かな希望を感じさせるようなイラストレーションを目指しています。

02. AKITAKA ITO EXHIBITION (FOX)

2013年に制作したのですが、この頃になると「無表情の中の感情」をどう表現するか、また「生き物の存在感」をどうポスターとして表現できるかをより強く考えるようになりました。技法としては水彩で描いた下地に白と黒のコンテを使っています。とてもベーシックな技法ですが、もう一度見直したいと考えました。

03. MOONLIGHT

月夜とコウモリの造形を組み合わせ、夜の静寂を表現しました。私はたびたび月をモチーフに描きます。夜空の闇と月の明るさのコントラストが美しく、また不気味にも感じます。描く対象は具体的なものですが、目には見えづらい情感や情緒を大切に描いています。

04. SILHOUETTE (BIRD)

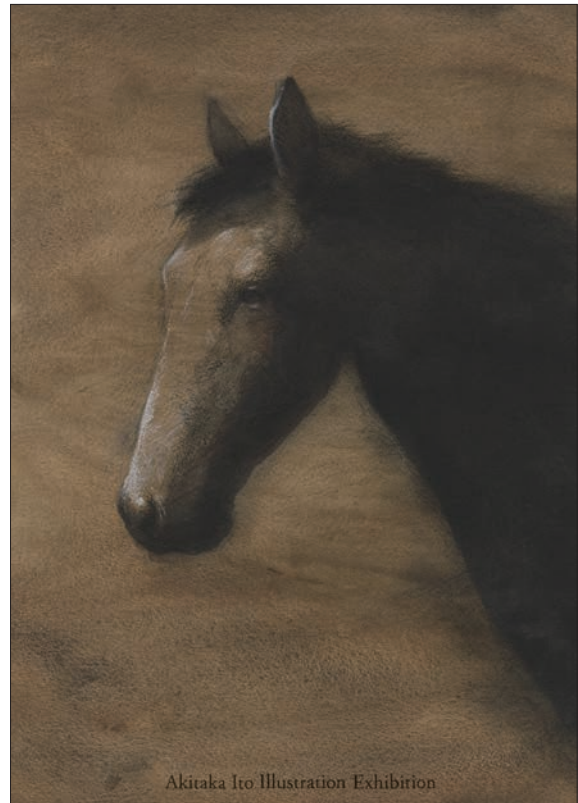
帽子の形の面白さをアイデアの軸に置き、詩的な物語が感じられる空間をイメージしました。それぞれ見る人の解釈で想像を膨らませることが出来るコミュニケーションを大切にしています。

05. SILHOUETTE (DOG)

黒紙を何枚も切り、偶然出来た形からアイデアを考えていきました。より造形をシンプルに、白と黒の色面の強さをイメージして制作をしました。強いコントラストとやわらかさが合致したイラストレーションをいつも心掛けています。

06. SILHOUETTE (RABBIT)

動物と人体、水彩と黒紙といった異なる物同士を同じ世界に溶け込ませ、現実と幻想が合わさった世界を作ろうと考えています。この作品はモノクロームのイメージでカラーージュを取り入れた初期のものです。ポスターとして表現する上で、省略や簡潔さを考えるようになり試みた作品です。また生き物の表情を通して、深い情緒が感じられるよう表現しました。



伊藤彰剛-01

[Title] AKITAKA ITO ILLUSTRATION EXHIBITION (HORSE)
[Size] 1030 × 728 mm (B1)
[Technique] --- Inkjet printing
[Year] 2014
[Client] 秋山孝ポスター美術館長岡 (APM)
[Category] Culture



伊藤彰剛-02

[Title] AKITAKA ITO EXHIBITION (FOX)
[Size] 1030 × 728 mm (B1)
[Technique] --- Inkjet printing
[Year] 2013
[Client] 秋山孝ポスター美術館長岡 (APM)
[Category] Culture



伊藤彰剛-03

[Title] MOONLIGHT
[Size] 1030 × 728 mm (B1)
[Technique] --- Inkjet printing
[Year] 2013
[Client] 秋山孝ポスター美術館長岡 (APM)
[Category] Culture



伊藤彰剛-04

[Title] SILHOUETTE (BIRD)
[Size] 1030 × 728 mm (B1)
[Technique] --- Inkjet printing
[Year] 2009
[Client] PATER'S Shop and Gallery
[Category] Culture



伊藤彰剛-05

[Title] SILHOUETTE (DOG)
[Size] 1030 × 728 mm (B1)
[Technique] --- Inkjet printing
[Year] 2009
[Client] PATER'S Shop and Gallery
[Category] Culture



伊藤彰剛-06

[Title] SILHOUETTE (RABBIT)
[Size] 1030 × 728 mm (B1)
[Technique] --- Inkjet printing
[Year] 2009
[Client] PATER'S Shop and Gallery
[Category] Culture



末房 志野 SUEFUSA Shino

1973年生まれ。1998年 多摩美術大学グラフィックデザイン専攻 卒業。2000年 同大学大学院 修了。2002年 文化新進芸術家国内研修員。2003年 東京藝術大学大学院後期博士課程学位(美術)取得。/受賞:第11回グラフィックアート3.3mグランプリ受賞、第18回コロラド国際招待ポスター展グランプリ受賞/作品集:『発生の記憶』(ISBN4902108062)/作品収蔵:デンマーク国立デザイン美術館
URL <http://www.shinoyaki.com>

- 01. TSUNAMI 2011.3.11
- 02. No more Hiroshima, No more Fukushima
- 03. Sarajevo1914-2014 —サラエボ事件から100年
- 04. Man
- 05. Bird
- 06. Face

プリミティブな表現を求めて 一焦げ痕による作品について

「穴」

白い紙に鋏を突き刺し、丸い穴を開ける行為は、単純な作業である。突き刺した鋏を円を描くように回していくと穴は徐々に大きくなる。穿(うか)たれた穴は微妙に歪んでいて、どこか生き物のような感じがした。

私はこの行為が面白くて紙にいくつも穴を開けた。穴はひとつとして同じ形にならない。この表現では、焦げ痕の方から私が表現したい世界のコンセプトやモチーフを与えてくれるかのように、私はただ焦がすだけで、おのずとそこにイメージが生まれてくる。この表現の状態は、表現する行為と基底とイメージの三者が未分化な状態である。

「線」

熱した鋏を紙の画面に押し当て、ゆっくりと動かしていくと焦げ痕による線が写しける。線の縁は焼け焦げる震えがあつて均一にはならない。二度と同じ線を描くことは出来ない。線で描く方法は、絵の具を塗り重ねて描くよりも直接的な手段である。早く描くことができ、輪郭線によって単純化、あるいはデフォルメすることでもある。

中石器時代以降の洞窟壁画や世界中に見られる岸壁画は、線画がほとんどである。対象の本質を抽出し、線による単純化あるいはデフォルメされた表現は、プリミティブな表現の最大の特徴のひとつといえるだろう。

「残滓」

紙を焦がし、その焦げ痕が線となり、伸びていく。やがてひとつの図を囲むように輪郭線が出来上がると、囲まれた内側の部分が下に落ちる。

見捨てられた切り屑、削り滓のような部分である。それらは不定形な形をしていて、見ているときさまざまなイメージが湧いてくる。あるものは樹木の小枝、あるものは人の形に見える。意味のない形の中に意味を見つけ出す楽しさがある。わき上がったイメージにしたがつて、小さな点を加えたりすると、鳥の形になったりする。

以上のように、まず穴によって、継いでふくよかな焦げ痕の線、そして不定形に切り取られた残滓によって私の絵が生まれた。この技法を獲得したことで、私の表現はより単純なもの、より自然なもの、より原初的なものを目指すようになった。

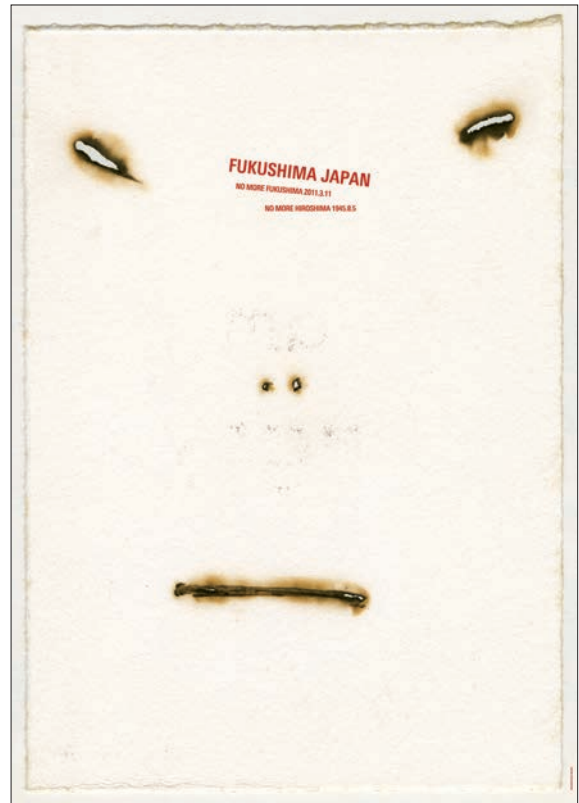
当然のことながら、先史美術、民族美術などプリミティブ・アートへの興味を抱かせた。それらの美術は形がシンプルで力強く、訴求力を強く持っている。素朴な表現であるにも関わらず動的で迫りに満ちている。あどけなさに似た親しみやすい表現のなかに強いメッセージが感じられる。メッセージは単純なものほど伝わりやすく、また同時に単純で的確な表現ほど難しいものはない。自分の作品をできるだけ単純で明快にしたいと考えていた私に、それは造形上の多くの示唆を与えてくれた。

プリミティブな表現とは、思想的には「無垢」、技術的には「素朴」、内容的には「未分化」な表現である。少ない要素、単純な形態、素朴な表現、人間的な感性、無垢な心情、生命と自然、これらがプリミティブ・イラストレーションのテーマである。



末房志野-01

[Title] TSUNAMI 2011.3.11
[Size] 1030 × 728 mm (B1)
[Technique] ... Offset printing
[Year] 2012
[Client] 多摩美術大学地震ポスタープロジェクト
[Category] Social



末房志野-02

[Title] No more Hiroshima, No more Fukushima
[Size] 1030 × 728 mm (B1)
[Technique] ... Offset printing
[Year] 2012
[Client] 多摩美術大学地震ポスタープロジェクト
[Category] Social



末房志野-03

[Title] Sarajevo1914-2014 —サラエボ事件から100年
[Size] 1030 × 728 mm (B1)
[Technique] --- Offset printing
[Year] 2014
[Client] "Sarajevo100" project
[Category] Social



末房志野-04

[Title] Man
[Size] 1030 × 728 mm (B1)
[Technique] --- Inkjet printing
[Year] 2010 (original works 2000)
[Client] PATER'S Shop and Gallery
[Category] Culture



末房志野-05

[Title] Bird
[Size] 1030 × 728 mm (B1)
[Technique] --- Inkjet printing
[Year] 2010
[Client] PATER'S Shop and Gallery
[Category] Culture



末房志野-06

[Title] Face
[Size] 1030 × 728 mm (B1)
[Technique] --- Inkjet printing
[Year] 2010 (original works 2000)
[Client] PATER'S Shop and Gallery
[Category] Culture



高橋 真理 TAKAHASHI Mari

1984年 神奈川県生まれ。2007年 多摩美術大学美術学部グラフィックデザイン学科 卒業。2009年 同大学大学院美術研究科デザイン専攻 修了。参加展：2009年 第9回世界ポストアートエンターレトヤマ2009(富山県)ほか

01. sign

2014年に発生した御嶽山の噴火。多くの被害者を出し、大自然の恐怖をあらためて感じた出来事だった。誰でも気軽に楽しめるレジャーだからこそ、非常時に対応できる警戒心が必要だ。

02. PENSION

テーマは「日本の年金」。高齢化社会が進む日本において、年金制度の今後が不安視されている。いつ破綻するかも分からず、減額や滞納などの問題を抱えながらもお金を納め続ける日本の年金制度は、不安定な積み木タワーのようである。

03. WARNING!!

今や社会問題ともなっている「歩きスマホ」問題。小さな画面に注視していると目隠しされているかのように周りが見えず、大きな事故にもなりうる。

04. NEET

テーマは「ニート」。クモの巣にかかった若者が、パソコンでネットを楽しみ、自堕落になっている。一度はまるとなかなか抜け出せないところクモの巣に似ている。

05. FOOD INSPECTION

「食の安全」をテーマに近年に起こった食肉の問題を表した。病気を患った家畜たちは、しかるべき検査を受けるため待合室に並ぶ。

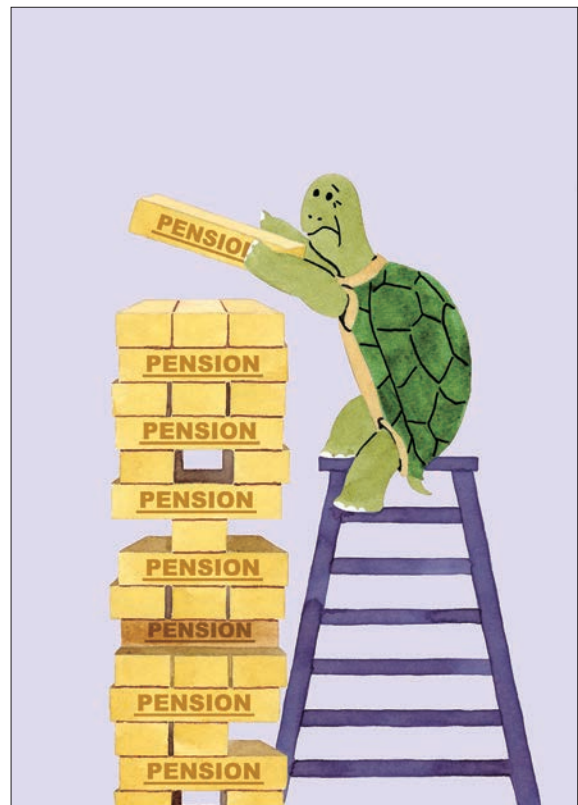
06. Welcome

テーマは「覚せい剤の防止」。覚せい剤の恐ろしさを、自らの手で身を滅ぼして粉になっていく骸骨で表した。



高橋真理-01

[Title] sign
[Size] 1030 × 728 mm (B1)
[Technique] --- Inkjet printing
[Year] 2015
[Client] 秋山孝ポスター美術館長岡 (APM)
[Category] Social

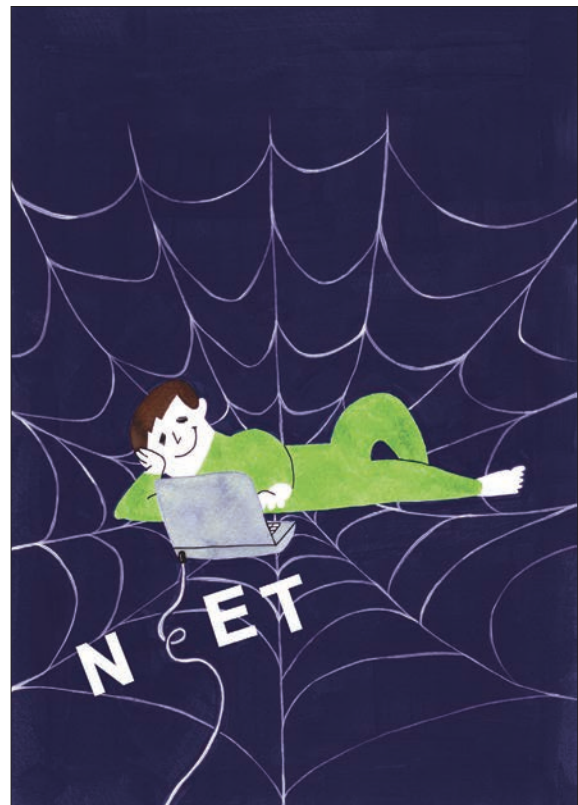


高橋真理-02

[Title] PENSION
[Size] 1030 × 728 mm (B1)
[Technique] --- Inkjet printing
[Year] 2015
[Client] 秋山孝ポスター美術館長岡 (APM)
[Category] Social



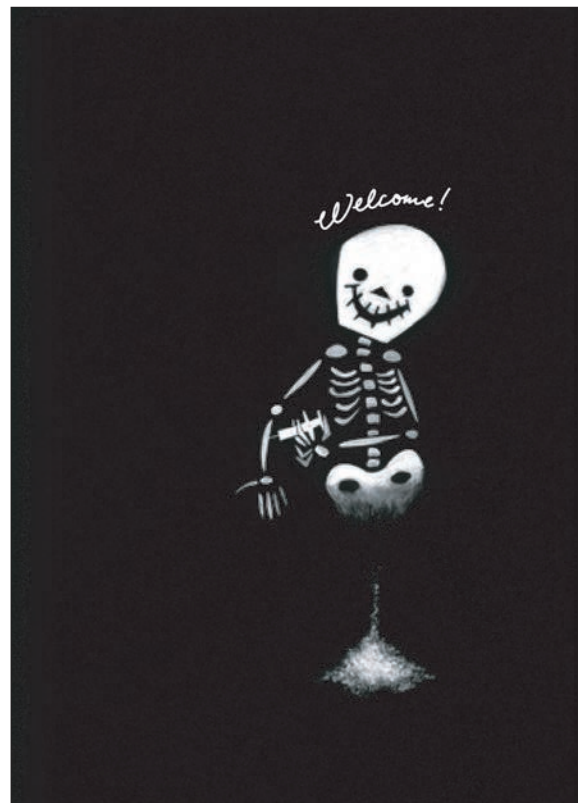
高橋真理-03
[Title] WARNING!!
[Size] 1030 × 728 mm (B1)
[Technique] --- Inkjet printing
[Year] 2015
[Client] 秋山孝ポスター美術館長岡 (APM)
[Category] Social



高橋真理-04
[Title] NEET
[Size] 1030 × 728 mm (B1)
[Technique] --- Inkjet printing
[Year] 2011
[Client] PATER'S Shop and Gallery
[Category] Social



高橋真理-05
[Title] FOOD INSPECTION
[Size] 1030 × 728 mm (B1)
[Technique] --- Inkjet printing
[Year] 2011
[Client] PATER'S Shop and Gallery
[Category] Social



高橋真理-06
[Title] Welcome
[Size] 1030 × 728 mm (B1)
[Technique] --- Inkjet printing
[Year] 2007
[Client] PATER'S Shop and Gallery
[Category] Social



小川 雄太郎 OGAWA Yutaro

1985年 東京生まれ。2011年 多摩美術大学大学院デザイン専攻修了。多摩美術大学生産デザイン学科テキスタイル専攻勤務(助手)。/ 受賞: 飛騨国際メルヘンアニメコンテスト優秀賞、中国深圳ユニバーシアード地下鉄ラッピングデザインコンペティション第3位 / 国際参加展: 第7回メキシコ国際ポスタービエンナーレ、第9回モスクワ国際グラフィックデザインビエンナーレ、第22回ショーモン国際グラフィックデザインフェスティバル、第11回香港国際ポスタートリエンナーレ、第5回中国国際ポスタービエンナーレほか

01. トムとねずみ / 2015年

2015年4月~2016年3月まで月1回、インターネット上で発表する作品のためのウェブポスター。「トムとねずみ」は、29歳の男性の日々の出来事を追った物語で、図は第1話「トムとアイロンかけ」のポスターである。

02. GOOD MORNING / 2014年

株式会社リクルートのギャラリー、ガーディアン・ガーデンのウェブサイト上で2014年9月1日~9月31日まで期間限定で発表した作品のためのポスター。「GOOD MORNING」は朝食をテーマに、朝の柔らかな光と気持ちの良い空間を言葉のない絵のストーリーで描いた。

03. TENNIS / 2014年

「TENNIS」という作品集をTOKYO ART BOOK FAIR 2014で販売する際に使用したポスター。「TENNIS」はテニスをテーマにしたドローイング作品集で、テニス独特の選手の動きや体つき、試合の合間の様子など、テニスのもつファッション性と動きの美しさを描いた。

04. イラストレーション対話展4 / 2012年

高橋庸平氏との「ポスター」をテーマにした2人展のためのポスター。当時、それまで大きいサイズのポスターばかり作っていたが、初めて小さいカットのイラストの仕事をして、ポスターはなんて大きいんだろうと改めて実感した。イラストレーションポスターはイラストレーション界の巨人だなと思った。そこでゴヤの巨人をパロディにした。

05. 千住 Art Path 2011 / 2011年

東京藝術大学音楽学部音楽環境創造科の制作・研究発表イベント「千住 Art Path 2011」のポスター。音楽環境創造科は「領域横断的教育」をテーマに掲げており、音楽と様々な種類の芸術が混ざり合う様子を、キスの絵で表現した。

06. PRINT DESIGN EXHIBITION / 2011年

多摩美術大学テキスタイル棟ギャラリーで2011年に開催された展覧会のポスター。プリントとはパターンデザインを生地に捺染することを意味し、学生がシルクスクリーンにより自ら捺染をしている様子を描いた。



小川雄太郎-01

[Title] トムとねずみ
[Size] 1030 × 728 mm (B1)
[Technique] --- Inkjet printing
[Year] 2015
[Client] 秋山孝ポスター美術館長岡 (APM)
[Category] Culture

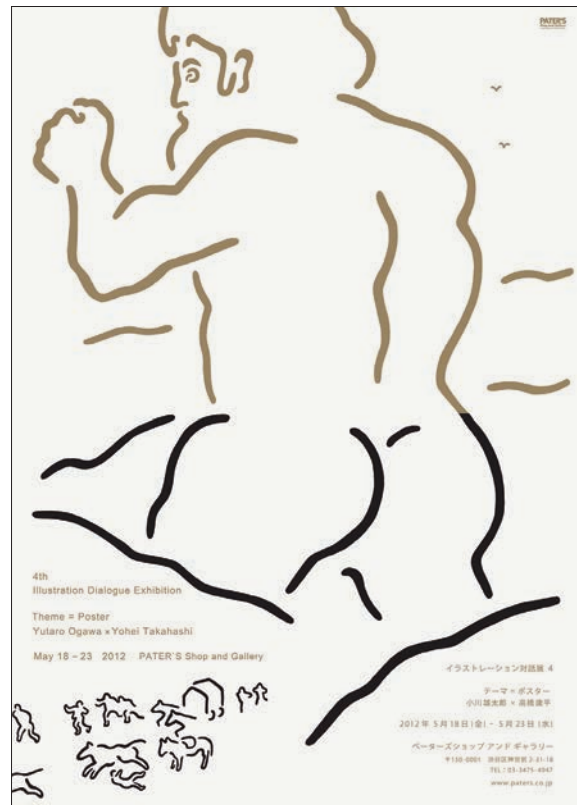


小川雄太郎-02

[Title] GOOD MORNING
[Size] 1030 × 728 mm (B1)
[Technique] --- Inkjet printing
[Year] 2014
[Client] ガーディアン・ガーデンギャラリー
[Category] Culture



小川雄太郎-03
 [Title] TENNIS
 [Size] 1030 × 728 mm (B1)
 [Technique] --- Inkjet printing
 [Year] 2014
 [Client] 秋山孝ポスター美術館長岡 (APM)
 [Category] Culture



小川雄太郎-04
 [Title] イラストレーション対話展4
 [Size] 1030 × 728 mm (B1)
 [Technique] --- Offset printing
 [Year] 2012
 [Client] PATER'S Shop and Gallery
 [Category] Culture



小川雄太郎-05
 [Title] 千住 Art Path 2011
 [Size] 1030 × 728 mm (B1)
 [Technique] --- Offset printing
 [Year] 2011
 [Client] 東京藝術大学音楽学部音楽環境創造科
 [Category] Culture



小川雄太郎-06
 [Title] PRINT DESIGN EXHIBITION
 [Size] 1030 × 728 mm (B1)
 [Technique] --- Inkjet printing
 [Year] 2011
 [Client] 多摩美術大学生産デザイン学科テキスタイルデザイン専攻
 [Category] Culture



御法川 哲郎 MINORIKAWA Tetsuro

1976年 さいたま市生まれ。2001年 多摩美術大学美術学部グラフィックデザイン学科卒業。長岡造形大学准教授。／受賞：アクリルアワード2005大賞、第1回東京装画賞2012審査員賞、第23回ワルシャワ国際ポスタービエンナーレ金賞(ポーランド)、第2回東京装画賞2013会員賞、グラフィックポスター年鑑2014プラチナメダル(アメリカ)／国際参加展：世界ポスタートリエンナーレトヤマ(日本)、メキシコ国際ポスタービエンナーレ(メキシコ)、ゴールデンビー・モスクワ国際グラフィックデザインビエンナーレ(ロシア)、ラハティ国際ポスタービエンナーレ(フィンランド)、ボリビアポスタービエンナーレ(ボリビア)ほか

URL <http://www.minorikawa.net>

01. 宮内撰田屋百景 旧三国街道

秋山孝ポスター美術館 (APM) にて、宮内撰田屋百景というテーマでイラストレーション・ポスター展覧会が開催された。立地地域の宮内・撰田屋地域を取り上げ、その魅力をあらためて掘り起こすための企画である。ポスターに選んだ場所は旧三国街道で、日本酒の吉乃川株式会社に左右を挟まれている。奥にそびえるネオンサインが印象的である。長岡の特徴である雪と麹菌で黒くなった板壁のコントラストの美しさを表現した。

02. Sarajevo 100, 1914-2014

このポスターは、ボスニア・ヘルツェゴビナの「Sarajevo 100」プロジェクトのために制作したものである。フランツ・フェルディナント暗殺(サラエボ事件)100周年、第14回サラエボ冬期オリンピック30周年、1992年から95年に起こったサラエボ包囲(ボスニア・ヘルツェゴビナ紛争内の戦闘)の記念である。ポスターでは傷を負った鳩を表現した。これらの傷は世界大戦や紛争の傷である。鳩は飛び立っていく。

03. Masters of Poland Posters in Nagaoka

秋山孝ポスター美術館 (APM) と長岡造形大学で連携し、「ポーランドポスターの巨匠 in 長岡」を開催した。これはポーランドにおけるリアリズム表現を用いたポスターの共同研究のため開催したポスター展覧会である。このポスターは、私が表現において影響を受けたヴィエスワフ・ヴァウクスキへのオマージュとして制作した。ポーランドのリアリズム表現に見られるデペイズマン(配置転換)の手法を用いている。

04. 5th Illustration Dialogue Exhibition

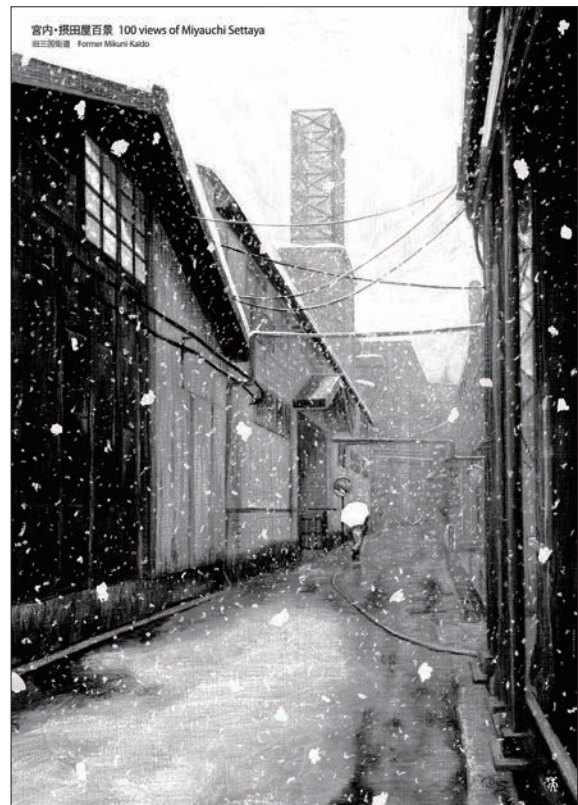
イラストレーション・ダイアログ(イラストレーションの対話)として、高橋庸平氏が毎年2人展を開催している。これは第5回目に御法川と展覧会を行った際のポスターである。色の違う2人の人物が何かを語り合っている(主張し合っている)様を表現した。人物はそれぞれある枠の中で話している。それは、内側に向かっていても外側に向かっていても見える。

05. Romeo and Juliet

ウィリアム・シェイクスピアの悲劇「ロミオとジュリエット」をテーマにしたポスターである。ロミオとジュリエットがお互いを求め合う様をそれぞれの手の表情で表現した。画面は繋がらない手と黒い背景で構成されている。これらは、周囲の状況や偶然により悲劇的結末へと導かれるその後の2人の運命を暗示している。

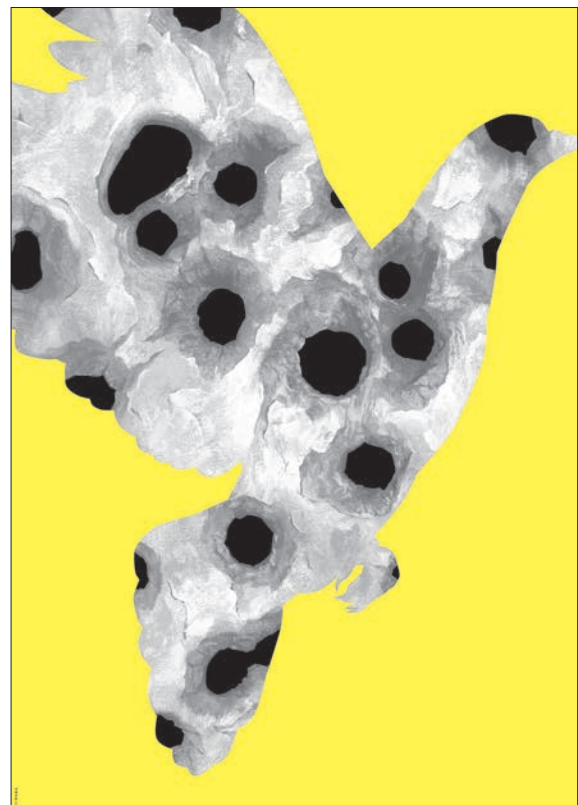
06. TSUNAMI

2011年3月11日に発生した東日本大震災の津波を表現した。この地震は、日本周辺における観測史上最大の地震だった。津波は多くの人々に圧倒的な恐怖感や無力感を刻み込んだはずだ。そこには大きな悲しみが伴う。この津波をなんとか記録に残そうとした。それは数値で表せるものについてではなく、津波が土地や生活、生命を飲み込んだということ、またテレビ中継等も含めこの災害を目の当たりにした人々の悲しみの記録である。



御法川哲郎-01

[Title] 宮内撰田屋百景 旧三国街道
[Size] 1030 × 728 mm (B1)
[Technique] --- Offset printing
[Year] 2014
[Client] 秋山孝ポスター美術館長岡 (APM)
[Category] Culture



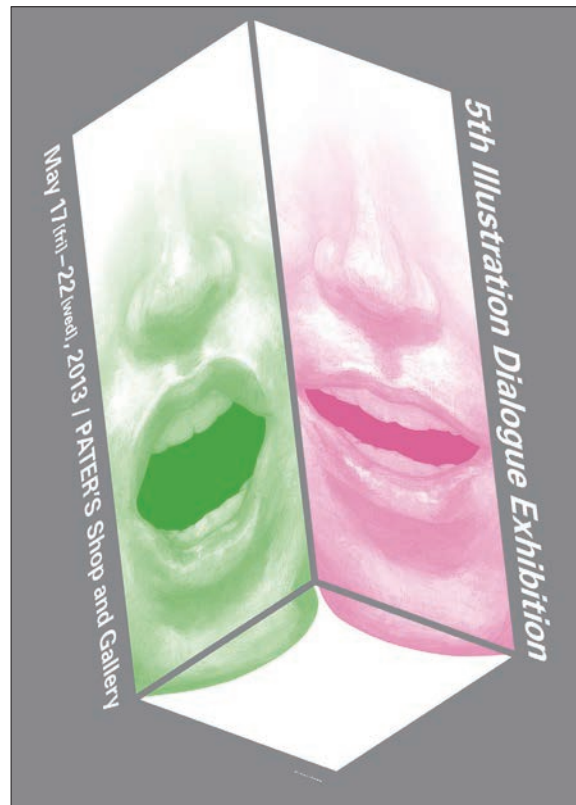
御法川哲郎-02

[Title] Sarajevo 100, 1914-2014
[Size] 1030 × 728 mm (B1)
[Technique] --- Offset printing
[Year] 2014
[Client] "Sarajevo 100" プロジェクト
[Category] Social



御法川哲郎-03

[Title] Masters of Poland Posters in Nagaoka
 [Size] 1030 × 728 mm (B1)
 [Technique] --- Offset printing
 [Year] 2013
 [Client] 秋山孝ポスター美術館長岡 (APM)
 [Category] Culture



御法川哲郎-04

[Title] 5th Illustration Dialogue Exhibition
 [Size] 1030 × 728 mm (B1)
 [Technique] --- Offset printing
 [Year] 2013
 [Client] PATER'S Shop and Gallery
 [Category] Culture



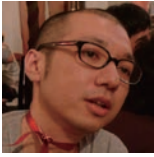
御法川哲郎-05

[Title] Romeo and Juliet
 [Size] 1030 × 728 mm (B1)
 [Technique] --- Offset printing
 [Year] 2012
 [Client] 長岡デザインフェア2012
 [Category] Culture



御法川哲郎-06

[Title] TSUNAMI
 [Size] 1030 × 728 mm (B1)
 [Technique] --- Offset printing
 [Year] 2011
 [Client] 多摩美術大学
 [Category] Social



千田 昇平 SENDA Shohei

1978年生まれ、滋賀県出身。2003年 多摩美術大学美術学部グラフィックデザイン学科卒業。/ 展覧会：メッセージ・イラストレーション展(2002年・銀座・モンスーンラボ)、シュールレアリスム・イラストレーション展(2003年・多摩美術大学デザイン棟ギャラリー)、シュールレアリスムポスター展(2005年・ギャラリーtray)、Illustration Studies ポストカード展(2007年・LAPNET SHIP)、多摩美術大学 × ポーランド・カトヴィツェ芸術アカデミー交流展(2012年・多摩美術大学美術館)/ 参加展：第2回東京装画賞2013、第2回上海アジアグラフィックデザインビエンナーレほか

01. 二本木

木と木の間には骨が架かっている。

02. モンスター

路地の向こうからモンスター。紐につながれている。

03. APM

APMと骨。骨は本質、長く残るものの象徴である。

04. 沼

沼から背骨が生え、その先には花が咲いている。

05. 毛皮

毛皮を被った男。紐につながれている。

06. 椎骨

骨が浮いている。その上に花。



千田昇平-01

[Title] 二本木
[Size] 1030 × 728 mm (B1)
[Technique] --- Inkjet printing
[Year] 2014
[Client] 秋山孝ポスター美術館長岡 (APM)
[Category] Culture



千田昇平-02

[Title] モンスター
[Size] 1030 × 728 mm (B1)
[Technique] --- Inkjet printing
[Year] 2014
[Client] 秋山孝ポスター美術館長岡 (APM)
[Category] Culture



千田昇平-03

[Title] APM
[Size] 1030 × 728 mm (B1)
[Technique] --- Inkjet printing
[Year] 2014
[Client] 秋山孝ポスター美術館長岡 (APM)
[Category] ----- Culture



千田昇平-04

[Title] 沼
[Size] 1030 × 728 mm (B1)
[Technique] --- Inkjet printing
[Year] 2014
[Client] PATER'S Shop and Gallery
[Category] ----- Culture



千田昇平-05

[Title] 毛皮
[Size] 1030 × 728 mm (B1)
[Technique] --- Inkjet printing
[Year] 2013-2014
[Client] PATER'S Shop and Gallery
[Category] ----- Culture



千田昇平-06

[Title] 椎骨
[Size] 1030 × 728 mm (B1)
[Technique] --- Inkjet printing
[Year] 2013
[Client] PATER'S Shop and Gallery
[Category] ----- Culture

イラストレーション対話展 2009-2015 活動記録

Report / Illustration Dialogue Exhibition 2009-2015

第1回 「シルエット」展 イラストレーション研究

会期：2009年4月24-29日 / 会場：PATER'S Shop and Gallery

出品者：伊藤彰剛、高橋庸平



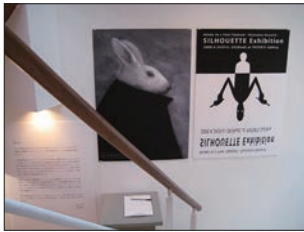
展覧会カタログ



pp. 2 - 3



pp. 6 - 7



会場風景



会場風景



会場風景



レセプション (2009年4月25日)

第2回 「プリミティブとシンプル」展 イラストレーション対話

会期：2010年5月21-26日 / 会場：PATER'S Shop and Gallery

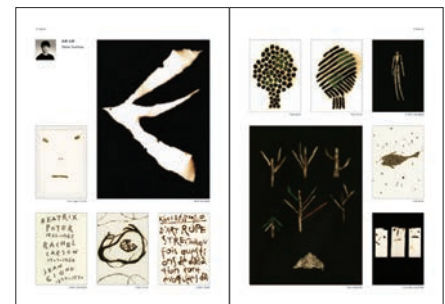
出品者：末房志野、高橋庸平



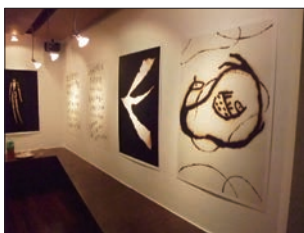
展覧会カタログ



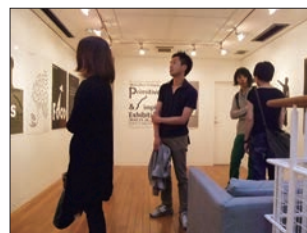
pp. 2 - 3



pp. 6 - 7



会場風景



会場風景



レセプション (2010年5月22日)



トークショー (2010年5月23日)

第3回 イラストレーション対話展3「メッセージ」

会期：2011年5月06-11日 / 会場：PATER'S Shop and Gallery

出品者：高橋真理、高橋庸平



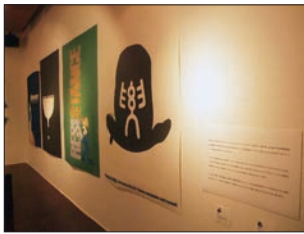
展覧会カタログ



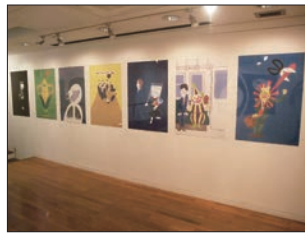
pp. 2 - 3



pp. 4 - 5



会場風景



会場風景



レセプション (2011年5月6日)



集合写真 (2011年5月6日)

第4回 イラストレーション対話展4「ポスター」

会期：2012年5月18-23日 / 会場：PATER'S Shop and Gallery

出品者：小川雄太郎、高橋庸平



展覧会カタログ



pp. 2 - 3



pp. 6 - 7



会場風景



トークショー (2012年5月20日)



トークショー (2012年5月20日)



集合写真 (2012年5月20日)

第5回 イラストレーション対話展5「ポスターの機能と表現」

会期：2013年5月17-22日 / 会場：PATER'S Shop and Gallery

出品者：御法川哲郎、高橋庸平



展覧会カタログ



pp. 4 - 5



pp. 8 - 9



トークショー (2013年5月18日)



トークショー (2013年5月18日)



レセプション (2013年5月18日)



集合写真 (2013年5月18日)

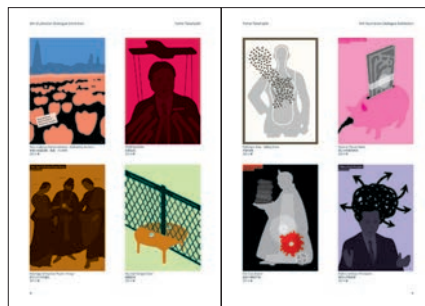
第6回 イラストレーション対話展6「命の視点」

会期：2014年5月16-21日 / 会場：PATER'S Shop and Gallery

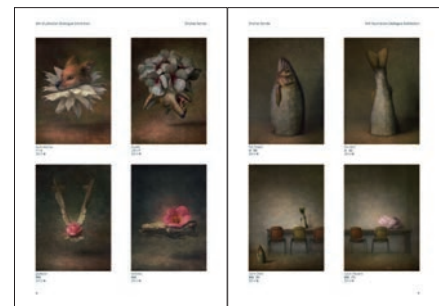
出品者：千田昇平、高橋庸平



展覧会カタログ



pp. 4 - 5



pp. 8 - 9



トークショー (2014年5月17日)



トークショー (2014年5月17日)



レセプション (2014年5月17日)



集合写真 (2014年5月17日)

「イラストレーション・ダイアログ」展 6年間の試み

会期：2015年4月18日 - 6月29日

主催・会場：秋山孝ポスター美術館長岡 (APM)

出品者：高橋庸平、伊藤彰剛、末房志野、高橋真理、小川雄太郎、御法川哲郎、千田昇平



展覧会ポスター / デザイン：秋山孝

[Title] ----- 「イラストレーション・ダイアログ」展

[Size] ----- 1030 × 728 mm (B1)

[Technique] --- Offset printing

[Year] ----- 2015

[Client] ----- 秋山孝ポスター美術館長岡 (APM)

[Category] ---- Culture

「イラストレーション・ダイアログ」展 6年間の試み は、2015年4月18日から6月29日まで秋山孝ポスター美術館長岡 (APM) で開催される第19回目の企画展だ。展覧会は、もともと高橋庸平の企画「イラストレーション対話展」で、2009年4月24日に第1回「シルエット展」を渋谷区神宮前にある PATER'S Shop and Gallery において開催し、継続的に毎年行なっている。この継続を俯瞰し、6年間の展覧会成果を検証するものである。ポスターデザインは、対話 (ダイアログ) と題した展覧会の特徴を表すために、対峙する両手を使った。そこには想像を越えた出会いがあったり、新たな概念を生み出そうとするイメージをシンボリックに表した。



展覧会リーフレット裏面

APM19

イラストレーション・ダイアログ 6年間の試み

発行日：2015年4月18日

発行者：秋山孝

発行所：秋山孝ポスター美術館長岡

〒940-1106 新潟県長岡市宮内 2-10-8 / Tel, Fax : 0258-39-1233

E-mail : info@apm-nagaoka.com URL : http://apm-nagaoka.com

編集／デザイン：秋山孝、高橋庸平

協力：伊藤彰剛・大石晃裕・内山咲子・柏大輔 (写真撮影)、増井千晶 (トークショー原稿)

※無断で複写、複製および使用を禁ず。

APM19

Illustration Dialogue

Akitaka Ito, Shino Suefusa, Mari Takahashi, Yutaro Ogawa, Tetsuro Minorikawa, Shohei Senda × Yohei Takahashi

Date of issue : 2015.04.18

Publisher : Takashi Akiyama Poster Museum Nagaoka

2-10-8 Miyuchi Nagaoka-city Niigata 940-1106 Japan / Tel, Fax : 0258-39-1233

E-mail : info@apm-nagaoka.com URL : http://apm-nagaoka.com

Edit/Design : Takashi Akiyama, Yohei Takahashi

Special Thanks : Akitaka Ito, Akihiro Oishi, Sakiko Uchiyama, Daisuke Kashiwa (Photo), Chiaki Masui (Talk show script)

© 2015 Takashi Akiyama, Published in Japan by Takashi Akiyama Poster Museum Nagaoka.

All right reserved.No part of this book may be reproduced in any form or by any means, electronic or mechanical,including photocopying or recording, or by any information storage and system, without permission in writing from the publisher.

・中綴じ製本/A4 (天地297×左右210mm)

・表紙・本文: マットコート135kg

